

第 4 回宝塚市協働のまちづくり促進委員会 会議録	
開催日時	平成26年 3 月 26 日 (水) 18:30～20:30
開催場所	宝塚市役所 3-3 会議室
次 第	1 開会 [議 事] 議題1 ホームページ掲載用第 3 回協働のまちづくり促進委員会議事録 について 議題2 協働事例の発表 議題3 事例の整理の仕方について
出席委員	久委員長、足立委員、飯室委員、河上委員、熊澤委員、久米委員、古村委員、田中委員、中山委員、檜垣委員、溝口委員、吉田委員、渡邊委員、塩谷委員、亀山委員、井ノ上委員、山本委員
開催形態	公開(傍聴人 1 名)

1 開 会

第 4 回宝塚市協働のまちづくり促進委員会の開会。

事務局から、本日の委員出席者数は 17 名、欠席者 2 名であり、「宝塚市協働のまちづくり促進委員会規則」第 5 条第 2 項の「過半数の出席」を確保しているため、成立していること、並びに傍聴希望者が 1 名いることを報告した。

議題1 ホームページ掲載用第 3 回協働のまちづくり促進委員会議事録について

事務局から、ホームページに掲載する第 3 回委員会の議事録の内容を、各委員にご確認いただきたい旨をお願いした。ご指摘いただいた修正を加えて、掲載することの了承を得た。

- ・ 4 頁の「民生委員は国からの要請だが・・・」を「民生委員は国（厚生労働大臣）の委嘱で準公務員と位置づけられ、守秘義務が課せられているが・・・」に修正

議題2 協働事例の発表

地域住民と開発業者の協働

- ① 宝塚山手台サプライズ!グランプリ!
- ② 宝塚山手台西 4 丁目自治会設立

発表者 1999年にまちづくり協議会10周年を記念した記録映画「陽日はまた昇る」を地域住民と開発事業者が協働して制作した事例と、新たに開発された地域で、自治会設立に向けて、開発事業者と地域の自治会連合会と行政とが協働した事例をあげた。記録映画は春夏秋冬をとおして地域を撮影し、制作するのに1年かかった。完成した映画は、小学校で上映会を催し、地域住民約1千人の参加があった。また、それをDV

D化したものは行政にも配布した。

「宝塚山手台サプライズ! グランプリ!」は、事業者が主催し、地域の自治会やコミュニティがマンパワーを提供して、実施した。これが本当の意味での協働になるかどうかはわからないが、ひとつの事例として提示してみた。詳しくは資料に記載しておりだ。

その他にも、山本山手台は、高低差のある地域なので、数年前から移送サービスなどの問題について事業者と協議中である。解決するのは大変難しいが、これからの高齢化社会の中で必要な事だと考えて取り組んでいる。

●Q&A

- 委員 事業者が、学生からアイデア募集をされているが、どうやって各大学に周知したのか。
- 発表者 インターネットで募集したと聞いている。また、事業者が大学をまわり、直接交渉した。地域の学生も入賞したと聞いている。学生からの評判がよく、申し込みが殺到している。
- 委員 大学との連携みたいな事にもなっているのか。
- 発表者 今後、大学との連携にもつなげていきたいと考えている。市内や近隣の大学などにも声をかけていく。
- 会長 通常、デベロッパは販売したら終わりというところが多いが、事例の事業者は協力的で、フォローアップをした事例だ。
- 発表者 現在、住民の自治会への加入率が低下しており、開発事業者にも自治会への加入を促進してもらっている。現在、地域内で一戸建てがのべ1000軒ほど建設が予定されており、その内約400軒が入居済みで、そこに新たに自治会が設立された。それについても事業者がたいへん協力してくれた。
- 委員 発表された中には、具体的事例が3つ入っている。記録映画「陽日はまた昇る」の制作と「宝塚山手台サプライズ! グランプリ!」、新しい自治会の設立。全体をまとめて、開発事業者と地域住民がまちづくりをしているが、事業としては3つある。これを事例集にどうまとめていくのか。
- 発表者 これはなかなか難しいと思う。
- 会長 ポイントは、開発事業者と地域自治会が核となって、いろんなイベントをからませながら大学などの他団体を巻き込んでまちづくりをしている構図かなと思う。
- 委員 そういう意味では、「サプライズ! 山手台そら遊び」はパンフレットだけを見ると主催は事業者のみになっている。全体の開発事業者と住民のかかわりだと考えるとひとつのイベントかなと思うが、単体で考えると、これはきずなづくりなどの範疇ではないか。単独の事業者がやるものは協働の範疇ではないのではないか。
- 発表者 そのとおりだ。冒頭で言ったように、これは協働ではないかもしれないが、ひとつの事例として提示したものだ。
- 会長 チラシでは、学生団体と事業者のコラボとなっている。ベースとして、山手台の自治会がかかわっているという構図ではないか。
- 委員 会場として小学校の体育館も入っているのだから、学校の協力もあったのではないか。

発表者 そのとおりだ。事業者だけでなく、学校の協力もあった。

会長 名前は出ていなくても、自治会が動いてくださったゆえに、学校とつなげたわけだから、自治会の推進力がキーとなっている。

他に、「サプライズ！グランプリ！」のアイディアのところに、事業者と学生の間地域住民が入っているの、これがひとつの協働の構図だ。

議題3 事例の整理の仕方について

会長 宿題として今まで紹介のあったものを、今まで事例を出していただいた方に知恵をしばらくながら、書いていただいた。書いてみた感想や、書きにくかった点、こう書いたらよかったなという意見などを聞きながら事例の整理の仕方を検討する。

① コミュニティひばり環境部会（北雲雀丘きずきの森の活動）

発表者 全容を全部書いているので、わかりにくい部分があるかと感じる。もっと事例としては簡潔にしてもいいのかと思う。

委員 これに限らず全部通じることだが、もしこの事例を見るのが一般市民を対象としているならば、もっと字を少なく、A4ぐらいで全体のおおまかな、あらすじがわかる程度にまとめた方がよい。イラストなんかも入れて、もっと詳しく見たい人は右の頁を見るとか、分けたほうがいいのかではないか。主体として右上に団体名があるが、はじめてこれを事例として見る人には、最初にこういう団体があって、発意があって、どういう働きかけをしていったというようなイメージや、全体の流れが分かりやすい位置関係の表現というものを少し工夫できたらと感じた。

会長 先ほどの話を聞いていて、マニュアルとして読ませるものにするのか、事例をひとつひとつきちんと整理をしておこうという観点にするのか、少し整理の仕方が違う。今は後者で作っている。今後、これを要約しながら読ませるほうに仕立てていく作業になるのかと思う。先ほど、摂津市の事例を紹介してもらったが、みな書き方が違う。それは協働のポイントとか仕組みが違うので、それを表に出していこうとすると、共通化しないほうが書きやすいということで、書いてもらった。今後、協働のポイントとか調整者の声とかを表に出していく。3つまとめて議論する。

② 中山台コミュニティ

発表者 文字が多すぎるのと、この団体を市民が見た時に、何の団体か説明がいたと思った。協働の担い手がだれかを書いて、これは誰と誰との協働なのかということが内容を読む前に分かったほうがよいと思う。それが入っていないので反省だ。内容を説明しすぎると、わからないだろうと思った。協働のポイントをどうまとめていいか分からなかったの、実践をするまでに、何をポイントにしたかと、実践している中で何がポイントだったかを書いた。実践するまでのポイントとしては、計画をきちんと作ったことが結果としては良かった。そこに住民、行政が入り専門家も入り、専門的な見地からアイデアをもらった。誰が役割を担うかということも、

その当時の人達が、スタートするまでにきっちり作ったから長年続けられたと思う。その辺は、計画段階がいかに大事だったかがポイントになる。実践していく中では、行政との役割分担をそのつど確認しながら進めたことが良かった。結果としては、地域の交流、地域への愛着につながった。先日 先生になぜこんなに長く続いたかと聞かれた時、楽しさですと答えた。言葉を変えると、一番のポイントは、この活動に引き続き参加する人は、まず自分の生き方を見直したのではないか。自分の人生の過ごし方というか、それが意義があると思ったから続いている。それは要するに、人との関係で言えば、交流とか地域とのきずなとなる。まず自分の生き方が、これで変わったというところもポイントかと思った。

会長 今の話は、協働のポイントと書いてしまうとそうなのだが、これからの人にこういうことを伝えたいということと、協働はこういうことをしたからうまくいったというようなツボとかコツを伝えるということだと思う。

③ ひょうごアドプト推進事業（宝塚NPOセンター）

発表者 これは委託事業なので書きにくかった。委託事業というのは仕様書があって、その中でどう協働していくかということなので、書くのがむずかしかった。私たちを中心にいて左手が行政と握手して、右手が市民と握手をする。その中で書くべきだったのは、アドプト推進事業として書いてしまったので、右手で握手した市民との間の一定の評価がアウトカムの部分かなと思っている。それを書くことによって、私たち事業者と協働することで、どれだけのアウトカムがあるかということを経営にも市民にも見てほしい。このシートではどうしても書ききれなかったという点でむずかしかった。

会長 あまり枠にはめないほうがいいのか。もう少し融通をきかして書く部分があれば、書きやすいということか。

委員 アウトカムの武庫川左岸の清掃活動をメインにして、協働は誰と誰がやったのか、誰がやってどういう結びつきで進めたかをメインに書いてはどうか。

私が思ったのは、NPOセンターや社協などの中間支援団体というものは、どんな役割を果たすのかを表現できないか。読んだ人が、中間支援団体とはこんな役割を果たすのか、中間支援団体を入れることで、こんなふうに事業が進むのか、結構役に立つんだという事例として、そういうふうにとまとめたらどうか。

発表者 アウトカムのところで、書いたほうがよかった。

事務局 中間支援としての役割というか、そういう部分でなにかこう事例でということでは今回お願いした。事務局の説明不足でそういう形には出来なかった。

会長 今までの話を聞いていると、全体像をキチンと記録していくということと、一方で何に重点をおいて記録していくのか、そのあたりが微妙に違う。それをこのシートをもらった段階では、発表者は全体をきちんと書かないといけないのかなと感じた。しかし、事務局の話だと、中間支援の役割だけを表に出して書いてもよかったということか。

事務局 結局、「協働の指針」の5頁にあるように、例えば相手が最初から決まっている協働だったり、発意してからパートナーを見つける協働だったり、5頁の流れのとおりではなく、飛ぶパターンがあったり、全て5頁の流れのとおりに行くパターンがあったり、いろんな事例がでてきたらよいのかと思った。

武庫川左岸の活動で言えば、この通りに当てはめていけるのかも知れないし、協働のところは最初からパートナーが決まっていて、いきなり協議、計画に行くパターンもある。いろんなパターンがこのNPOセンターの事例からはひろってもらえるのかなという感じがする。

会長 左岸の話しを表に出すと、発意からずっと書けるが、委託事業の側面で言うとまた違う。そのあたりをどちらかに重点をおいて書くのか、2枚に分けて書くのか、両方ありかなと思う。他の事例もそうだと思うが、ひとつひとつのプロセスとか事業の内容とかは、微妙に回し方が違っている。それを1枚に収めてしまうゆえの、困難さがある気がする。

事務局 これについての事例はこの頁にあるという形で書ければ、「協働の指針」みたいにわかりやすくなるのではないかと思う。

会長 そういう意味では、なぜこの事例を選んだのか、この事例の面白いところとか、本当はどうなのかを、もう少し強調したほうが読む方は良いのではないか。どういうことでこの事例を選んだのかが分かると思う。

委員 まとめる時に整理すればいい。事業としての説明はそれで生かして、もうひとつのところはそれでまとめ、両方生かして、見方を変えればこっちで見れるよというのでよいと思う。協働の担い手に、主催者が二人いれば、こことここが主催して、こちらは委託した人とか、分けて表現をすればわかりやすいかも。

委員 まとめた時に5頁の順番でまとめたが、今思うと4頁の協働の原則の6番の「役割分担」の役割という部分をもう少し中に折り込んだ方がわかりやすいかなと思った。それぞれの役割がどうなのかが必要かなと感じている。

会長 図があり、それぞれの主体があって、それぞれがどういう関係を結んでいるのか、一見して分かるが一番よい。

委員 いただいた役割分担をみると良く分かる。先生に聞いたものをここに落とすと、関係図も良く分かる。

会長 摂津市の時も悩んだが、最終的に誰がどうやって連携してやっているのかの図になる。もうひとつ、時系列にまとめることが大事で、まず誰に呼びかけて、誰と組んでそれがどんどん広がってどうつながってきたかが必要。紙媒体では非常にむずかしい。第一段階、第二段階、第三段階という形で、最初はここから始めてこう広がり、こうなりましたという段階図がより分かりやすい。

委員 紙媒体でいくということだから、まず関係図で見ようかなという気になってもらわないといけない。読む気になってもらおうと思ったら、今言われたように関係図とか、面白いイラストのようなものがあれば、少し入っていきやすいかなと思う。

会長 ここにある発意、つながり、共有、協議 特に上の部分の関係図と重ねながら説明

すると、分かりやすい。これを A3 に収めようとするから難しい。もう少しこういうことを説明しましょうぐらいの共有で、あとはそれを自在に動かしてもらおう。

委員 この事例を読む時に、私は活動していないから難しかった。発意、つながり、共有がそもそも何を言おうとしているのか分からない。「協働の指針」をみたら説明があるが、それを見ないとつながりと共有はどっちなのかと思った。この定義がわかるような、これに副題的な、誰がいつどう思ったの、という風に表現すると一般の人に、もう少しわかると思う。

委員 本当にそうだと思う。事務局からこのシートが送られてきたときに、何を書いてあるのか分からなかった。一般の市民が読んで、一般市民が協働するのであれば、書く側がすぐに書けるようなものを出さないとだめですよと事務局にも言った。

会長 発意というのは、背景もからんでいる。誰がどういう思いをもったのかということころですね。

委員 協働を進めるということで促進委員をしている。発意というのは、従来は行政側が提案していたものを単に批判しての繰り返しでは市がよくなる。市民が主体で、発意・計画し、つながり・評価していこうと考えているのが協働の精神だと思うが、市民がはたして発意できるのかという素朴な疑問がある。市民がこんなんでできないのかなという次元で考えていける文章であってほしい。計画を出来る人は誰でもできるわけではなく限られていると思う。中心になってやってきて壁があったと思うし、これいけるのか、失敗するのではないかと思いがあったと思う。その辺を赤裸々に書いてもらったほうが身近な感じになるのではないか。

会長 みなさんこのシートに入れようとして、形式ばっている。この前の発表が素直にシートに表れていたらいい。コミュニティひばりの場合は、近くに荒れ放題の空き地があってなんとかならないかというところ。中山台コミュニティは、最初は体調が何かおかしい、行政にきいてもなんとかならないし、じゃあ我々でなんとかしようとして立ち上がった。その話がストレートにつながるような物語と、その横に順に広がっていく図があると分かりやすい。

委員 何か新しいことをしようとしてもなかなか手が上がらない。やりだして、うまくいきかけたら、手が拳がってきたが、どこかで行き詰っていたら手を挙げてくれる人は来ないと思う。だから、ここで頓挫したということ、赤裸々に書いてほしい。新しく何かをやる人にとっては、励みになると思う。まずやってみて、その中で協働の相手としていろいろな団体がある。極端な話、あの団体は不要で、その団体が来たらまとまらないということがあっても、大きく腹を据えてそんな団体をも含めていかないと協働はできない。みんなでそこのところを我慢していかなければならないと思うし、その辺りがペーパーでうまく書けないのかなと思う。

会長 事例を見て思うのは、でっかいことを考え過ぎていませんかということ。自分たちで出来る範囲でやったらいいんだけど、どうしても何百人規模でやろうと考えるとできない。最初は 10 人でもいいのではないか。そこもポイントだ。良いことを考えて一歩が出ない原因は、でかいことを考え過ぎるという話になる。

委員 指針の「これが協働やったんや」というのはしみじみといい言葉だなあと思うが、例えば、「これが発意やったんや」というぐらいの書き方で、この漢字2つを省いて、書いてある内容が発意だとわかるような、分かりやすい言葉で書けたらなあと思った。

会長 ストーリー（物語）は思い出しながら書いて、全体が出てきた段階で、ここが発意、ここがつながり、ここが共有の部分だったと後から書いていくのもひとつの手法。つながりと共有というものを仕分けするのは、なかなか難しい。共有は誰かに言って共感を覚えて仲間になることで、その時もうすでにつながりとなっている。また今までのつながりを使って呼びかけて、そこから共有が生まれていく。つながりと共有はスパットわかれているわけではなく、からまりあっているので、そのあたりを表現するのが難しい。

委員 3 頁にある協働の公共的な領域は確かに協働の領域は入るが、課題を見たら強弱はあると思う。課題があっても絶対してほしい部分とあったほうがいいのか。そういう意味では、市民が何かしたいとなった時に、なくてもいいと思ったら取り組みはしないし、あったら良いと思うと取り組む。そういう強弱も課題の領域の中ではいろいろあって、ここには書いていない公共的な課題の領域の強弱ということも背景にはあるのかなと思う。

会長 そのあたりは、別のところで整理をしたほうがよいのかなと思う。やっている内容の種類とか必要性の強弱、もうひとつ感じているのは、かける時間の長さ、つまりすぐに解決しないといけない問題と、もう少し時間がかけられる問題、それによっても動きが違う。そこは全体が出てきた段階で整理をしていく。おそらくそれで事例のパターンが違うのが分かってくる。スッキリとしてくるのではないかな。

委員 内容よりも市民に読んでもらうということで、字は極力少なくして、アイコンを使った工夫をしてみるのもよいのではないかな。行政が作ると枠があるので、ここに記入しなければならないと思ってしまいが、アイコンを使うとなんとなく柔らかい感じがする。みなさんの意見を持ち寄って作ったものだというのがあり、なんか工夫したらどうか。

委員 なにか見本をつくって。

会長 私もデザインで仕事をしているが、デザインへ持っていかうとすると、図もデザインだが、かなり言いたいことを整理していかないと、デザインできない。逆に、デザインすることによって、何がしたいのかわかることもあるので、有効かとも思う。みんなでこれをデザインしていかうよと議論していくと、デザイナーはやりやすいかな。

委員 当初、事例を出そうとはじまった議論が、今 マニュアルというものと、ごちゃ混ぜになってきている。マニュアルとしては今いろいろ出ているが、わかりやすくするというので、工夫しないといけない。だから、少し線引きして、事例は事例でマニュアルとして使う場合にはどういうふうな表現にしようかというのは別のことだと思っている。当初、事例を出してくれと言われたのでこの事例を出した。これ

がこのままマニュアルになるとは思っていなかった。

委員 マニュアルというもののイメージは、協働のやり方はこういうふうにしたらいいですよ、中間支援とはこういうふうに関連したらいいですよというような文章がきて、具体的な事例は、前か後ろに別に記載する。マニュアルの一部に事例集があって、そうかこういうことかということが解かればよい。

会長 マニュアルと事例集は違うが、マニュアルを読んだ人が事例集が参考になるような、そんな整理の仕方を話し合っている。より多くの人に伝えられるような整理ができればよい。雑談になるが、日本史はだらだらと書くのがよいとされているが、建築などはすぐに図にしていかなければならない。

委員 できるかどうかわからないが、リレーションを考えなければならないが、アンケートを読みなおしてみたら、「協働の指針でもむずかしいので、これを漫画にしてほしい」というのがあった。冒頭の発意から共有までのストーリーがあるが、漫画になったらいいなと思った。誰が描くのかは、わからないが。

会長 河内長野は漫画で対応した。

委員 宝塚市の民生・児童委員連合会の会報の作成を3年間担当してきた。今の人はテレビ世代で文字を読まないの、写真などをたくさん入れて、読みやすく、隅々まで読んでもらえる会報を作りましょうという思いでやっているが、長い文章では若い人に読んでもらう事はむずかしい。市の広報でも協働のことを漫画でPRした。こういうのをどういう形で漫画にするのかは、非常にむずかしい話だと思う。やっぱり今の人に見てもらおうと思うと、若い人にやってもらわないと、なかなか年寄りではむずかしい。

会長 次のステップの話になるが、思いがあってもどう動いてよいかわからないので止まってしまっている人がいた時に、マニュアルを読んだら、私の思いはこう動いたら誰かとつながれるんだなあというのが、うまく伝われば、もう少し地域活動の参加者も増えてくるのではと思う。

委員 この委員会で協働の担い手がどういう役割を果たしたかという確認を、発表者だけではなくて、みんなが確認できる形で整理する。その上で、マニュアル化については、マニュアルを一つにしようとする、いろいろ省略しすぎだとか、出過ぎだとかが出てくるので、全く協働を認識していない人向けのマニュアル、活動している住民の団体に向けてのマニュアル、行政マン向けのマニュアルなど、真意は変えないが、説明を変える、手間はかかるがそんなマニュアルを作る方法もあるのかなと思う。

会長 初級編、上級編とか。

委員 促進委員会で行政にいろいろ提案していくことになったら、漫画チックでは理解が進まないと思う。詳しくする必要もあると思う。

会長 初心者には「あなたにも始められる協働の手引き」、もうすでに協働で活動している人には「さらに協働を進めるため」など。

委員 アンケートによると、職員は職員の立場があるので、その立場で考えなくてはいけ

- ない。市民向けのマニュアルをそのまま職員に渡しても合わない。その立場の人が協働していて、どういう考え方をしなければならないのかは別途必要かなと思う。
- 委員 職員向けの研修会の参加者から、行政と行政の協働はなぜ入っていないのかと聞かれた。私は協働のスタートは市民と行政のことを定義しており、行政と行政の協働は範疇ではないと説明しようと思ったが、その後、そういう発想もいいかなと考え直した。縦割り行政の中でネットワークを作る重要性を言われているが、なかなか実現しない。どこかが主管となって、お互いが協働のルールに従ってやるのが解決方法だとしたら、行政と行政の協働は、概念は違うがカッコ付きでもあってもいいかな。行政向けというのも違う解説が必要かなと感じた。
- 委員 若い行政マンのユニークな発想だ。行政は協働ではなくて、協調だ。
- 委員 業務の中でなんとかしようという概念では、協働はうまくいかないのでは。
- 委員 職員の中でも意識は千差万別だ。役所の中での仕事も、1つの部署で出来ない仕事が増え続けている。連携という言葉は役所の中ではよく使われるが、協働までの考えには及んでいない。行政と行政の協働も考え方としては面白いと思う。
- 会長 行政と行政の協働、県と市との協働などもある。
- 委員 そうなるとマニュアルも、市民向け初心者用と内容が違ってくる。
- 委員 行政内部のそういうものは、仕組みを作ればできることであって、市民は市民の中に仕組みを作れない。例えばプロジェクトで動くのは民間だったら当たり前だが、行政は現実出来ていない。そこは協働と言わなくても、今の行政の職務の進め方で、どういう仕組みでやろうかという話しをしたら、そんなにむずかしい事ではない。
- 委員 協働の原則を適用して業務をしたら、もっとスムーズにいくのではないか。これをあてはめて、自分たちで仕組みをつくれればよい。
- 事務局 指針の6頁にあるが、市民向けのマニュアルをやると同時に、行政内部で連携する仕組みをつくる。私たちが発想するのは、組織を超えたプロジェクトチームなどの発想しかないので、マニュアルと同時に指針6頁の③「行政内部の横の連携強化」もいっしょに議論していただけたら有り難い。
- 会長 そのあたりは、また議論をしながらだと思うが、民間企業と行政の動きは違う。なぜ行政が動けないということ、きちんと議論して整理していかないといけない。一つは、行政はみんな違う会社なんだということ。それぞれ目的が違う、上にいる省庁も違う。会社でいえば、1つの目的を共有する部分から進めるが、共有をされていないところからスタートするので、行政の連携は非常にむずかしい。それから議会との関係、行政は自分で物事を決められない。一番わかりやすいのは、土地が出てきても、すぐには買えない。予算の執行権を自分がもっていないからだ。そこをまず変えていかないといけないといけなくなれば、かなり大なたをふらなければならない。
- 委員 行政が自らぶち壊していくのは、むずかしいと思う。市民が変わろうとするのだから、行政も変わってほしい。でも今の状態では変わることはできないとも思う。
- 会長 協働は行政型の縦割り組織では動かない。行政改革をやるときに、人をくっつけて部署を一つ減らしたというのは、行政改革ではない。もっと根本的に変えてもらわ

ないと、協働にはならない。

委員 これを作った経過では市議会を入れていない。さわらなかつた、さわれなかつた。宝塚市は、「まちづくり基本条例」にも議会は全くでてこない。それは取り上げられなかつた理由もあると思うが、議会が執行権とかいろいろ持っているの、議会が入っていないとスピード感が落ちる。協働をスムーズに進めるには議会の協力がなくては出来ない。それが出来ない宝塚の現状がある。議会と住民の意見が並行していけばもめることはない。議会が盛りこめられていないのが、宝塚市の課題である。

委員 議会の中でも協働についての話しは出ていると思うが、議員は市民の代表だから、この委員会に参加は不可能だとしても、協力してもらうことはできるのか。

事務局 それは可能だと思う。

会長 難しい部分もあるかと思うが、今の物事の進め方というのを根本から考え直さないとうまくいかない部分がかかなりある。議会と行政の関係で言うと、行政は執行機関だから、物事を決めるのは議会。行政は決定されたものを執行するが、ほとんどは行政が決定している。行政に対して市民はものを申せない。議会をとおしてくれとなる。議会が決めるのなら、市民は議会に参加しないといけない。ひとつひとつのものに参加していない。4年に一度の投票だけでおまかせしている認識でよいのか。誰が決めていて誰が参加しているのかが、今すごく問われている。パブリックコメントや公募委員の制度は、議会だけでは民意の反映が十分でないという判断で様々な市民参加の手続きを進めている。複数の参加のプロセスを経ておかないと、議会まかせはどうなのかな。

委員 行政の協働の話が出たが、議員と市民の協働、議会と市民の協働はないのか。

会長 あるし、なければならない。4年に一度信託をしているという手続きでやっている。それでいいならそれでいい。ひとつひとつの案件に対して、市民の意見を聞いてほしいとなれば、議会が開会前に公聴会を開くとか、ワークショップをする手もある。

委員 議会に意見を言うとき、陳情や請願があるが、手続きを踏んで出すのが原則。ディスカッション的な協働は開かれたことがあるのか。報告会といっても一方的に意見を述べているだけ、そういうことを是正して、議員の質を改革していかないと何もできない。

委員 国会の議会は立法機関だが、地方自治体は立法機関ではなく、議事機関であるので、市長は予算を提出できるが、議員は予算を提出できない。決めるのは議会だが、提案権は市長にある。どちらも市民の代表だが、国会と力関係が違う。今は、住民側が市長が議会に意見を提出する前に市民の意見を反映させようとして動いている。議員も日常的に市民と政策を議論する必要がある。

委員 議会の中で議員から市民の声や提案が出て、行政が気づいて考えて提案していく。その提案していく中で、市民委員を含めた審議会などで一定の形が決まれば、議員だけでなく、パブリックコメントをかけて市民の意見を聞いて、決定していく。その後、議会で再度審査するのが、今のスタイル。

そこで、議員からどこで市民の意見を聞いたのか、逆に指摘をうけることがある。

行政も参画、協働を認識しないとイケない。議員もそういうことを意識していただくことがこれからは大事と思う。

会長 仲良く協働しましょうではなくて、我々が市政にどう参画できるか、今の制度がそれでいいのかという時期に来ている。

委員 法律とかそういう仕組みになっているからと、あきらめずに、その上での工夫ができないのか、そこをマニュアルにもっていく。それには基本の仕組みをおさえる事が必要だ。

委員 この場に議員に来ていただくことはできるのか。

会長 できると思う。

委員 傍聴している人もいる。意見交換会をしたい。

事務局 それは議会に聞いてみるが、可能だとは思う。

委員 まちづくり協議会の活動をしているが、いまある市民参加条例やまちづくり基本条例だけでは、動きにくい部分がある。まちづくり協議会の定義とかもはっきりしない。議会で、何か動きやすくなるための、条例をつくってもらうような考えもほしい。事例発表をまとめることをやっているので制度設計についても議論してほしい。

事務局 協働を進めるための効果的な仕組みづくりもこの委員会のテーマのひとつなので、協働のマニュアルを早く進めたいと言っていたが、いろいろな課題もあり、次のテーマもやっていきたい思いはある。ただ中途半端のマニュアルもいけないので、部会などを設置して、並行してやれればと思う。

委員 まちづくり基本条例をはじめとした規範の再検討が、なぜはいつているかと言えば、宝塚市のまちづくり基本条例や市民参加条例は十何年も前に作ったものだが、それを作りかえるところまでいかないと、今抱えている問題は解決しないだろうという考えからきている。まちづくり基本条例をそこまでの視点をもって点検することができないのか。促進委員会は、マニュアルを作って終了ではなくて、見届ける。仕組みとしては議会を含めて考える。まちづくり基本条例に議会はひとつも入っていない、他市の市民基本条例には議会も入れた環境となっている。課題はここにある。

会長 伊丹市は入っていない。議会は議会で考えもらいましょうとなった。和泉市は入れているが、議会は議会で決めてもらい、逐条解説（説明文）も議会が書いた。それが一番分かりにくいと市民は言っている。

委員 市によっては、まちづくり基本条例に、協働を担うのは行政、議会、住民であると書いておいて、実際には議会は議会基本条例にのっとるとするなどの書き方をしているところもある。

委員 協働の指針づくりから関わっているが、今の宝塚を変えないと進歩しない、良くなれないという意識がある。何かを壊していかないとイケない、一点突破をかけないと市は変わらないという思いがある。

委員 例えば宝塚の道路計画もどうしようもない状況になっている。市役所前の道路がなぜ片側一車線なのか。小浜の交差点もそうだが、もっと市民の声を聞いて、道路をつくっていかなければいけなかったことだ。役人だけが考えた道路計画だと思う。

- 会長 だからこそ地方分権をしている。施策を身近なところで決められるようにしないと、解決しない。今、権限は来ているが財源が来ていないのが問題。地域で決めてほしいが、その条例がない。都市計画道路と生活道路は違う。身近な生活道路の事を地域で決められない。お金の割り振りをしないと出来ないので、決めてもしょうがないとなる。
- 委員 都市計画マスタープランがあるが、ワークショップでは、市役所横の道路を複線化すると書いてあるが、本気かと思う。具体策の裏付けがないまま書かれている。
- 委員 問題は山積しているが、お金の問題よりも宝塚市に都市計画プランのプロがいるのか。都市計画をどう考えているかわからない部分がある。
- 会長 こういう「市民の思いが届いていない」ということが、我々の協働の分野で議論していかないといけない事ではないか。
- 委員 まち協の位置づけもあいまいだ。力も今のところはない。
- 委員 行政も委員として入っているので、限界が分かればどうすればよいかの工夫をしていけばよいのではないか。
- 委員 道路問題については、土木部門も過去からひきずっている課題だ。
- 委員 こういう意見を市民がもっていることを行政にも理解してもらって、決定の前に市民の声を聞いてほしい。
- 会長 個別の具体例から変えていかないと、今の状況は変わらない、根底にある何かを委員会で見つけていく作業をすれば、みんなで提案もできるのではないか。
- 委員 静かな市民、ものを言わない市民の思いをどう吸収するのかという責務が、我々にはあると思う。ものを言わない市民はもっと強烈なことを思っていると思う。
- 会長 市民参加が進んでいくなかで、参画はしているが、やはり一部の市民ではないかの声も上がっている。それもすごくレベルの高いエリート層ばかりが集まって、計画をしていることが、本当に市民参加なのかと疑問を投げかけるところもある。
- 会長 本論に戻すが、まとめ方だが、今のマニュアルにとらわれることなくやる。まずは誰が思いついて、どのように広げていったのか、協議、事業計画はどのような進め方をしたのか、協議と事業計画は実践活動とからんでくるのか。どのような場所でどのような話し合いをしたのか、事実を淡々と書く。協働のポイントとか調整者の声はひとつでも良い。ここがポイントだったよということを強調してもらおう。この3段階構えかな。スタートしてどのように広がっていったのか、どのように進めてきたのか、協議の場所をどのようにつくって、どう進めたか。最後に振り返ってみて、ここがポイントだったとまとめていく。
- 委員 まとめる言葉も発意、つながりという言葉を書かないで、「どうして始まったの」「どうやろうとしたの」、最後は「協働のツボはどこだ」というふうにまとめたらどうか。
- 会長 この順番に書かなくてもいいので、きっかけは何だったのか、こういうことを言いたいというふうに。中山台のケースでいうと、ひとりの市民の体調がおかしいから始まったので、その方を中心に、そういうストーリーにしてほしい。
- 委員 協働の担い手が誰だかわかるように書いた方がわかりやすいと思う。発表者が主体

だが、どういう主体の人がどういう形で役割分担をして協働しているのか、分かりやすくなるようにまとめてほしい。

会長 それは、ストーリーを書いていくと、最初の何かがあってそれが広がって行って、最終はこうですというのを書けば、どのようにつながってきたかが分かる。最初から構えて書くよりも、最初はこの人、次はこの人にくっついたというように、広げていくと、最終的にはおもしろい図がかけるのではないか。

委員 事例集の整理はこの3つのパターンでいくのか。発表者が主体だが、社協は参加団体が多かったので、自分が所属している団体の名前がでてきたら、私たちも参画したんだなあというのが分かりやすくてよかった。

会長 書いていて分かりにくいところが出てきたら、また聞いてもらう。

委員 入力フォーマットは事務局で統一するのか。

事務局 統一したフォーマットはむずかしいので、自由に書いて出して、それをこの会議で、まとめる。それぞれのパターンに合わせて各自で書いてもらう。

会長 3パターンがあるので、自由に書くと少し違うかもしれないが、それはそれで面白い。その他何かあるか。

委員 来年度の進め方の話があったが、どんなテーマとするのか。

事務局 来年度は毎月ぐらい委員会を開催できるので、部会を作ることであれば、毎月にはならなくてもよいと思う。

会長 事務局としてこういうことを議論してほしいということを提示してもらい、どういう形にするかは次の議論となる。

次回の日程 第5回促進委員会 4月24日(木) 18:30～